

前号を読んで

## 「まだ遅くない」と激励できる教育

金 仁和

人文社会科学研究科講師

学生時代はありあまる時間と、勉学に集中できる環境、同世代の友人や先輩たちに囲まれた、人生の中でも最も贊沢な時間だとよく言われる。しかし、実際にその贊沢なはずの時間の中で、意欲にあふれ向上心はあるものの、「何か」が見つからず悶々と、あるいは割り切ってバイトに精を出す学生もいる。

「大学に入ったら、やりたい何かがきっと見つかるはず」と信じて激しい受験競争を乗り越えて入学してきた学生に大学は何が出来るのか、どう変わっていくべきかについてよく言われていることではあるが、前号の加藤佳子さんの「卒業生の眼」を読んで改めて考えた。

高校を卒業し大学に入っても自分の勉強したいもの、目標とするものが見えてこない。それも当然である。社会に出てもまれ、あるいは母国以外の国での生活を経験し、今までの自分を作ってきた価値観から離れ

てみる。葛藤を経験して考える。ぬくぬくしているばかりでは疑問や探究心はなかなか生まれてこない。既に人生の目標を見つけ、常に自分をその目標へと突き動かす動機が揺るがない人はいい。しかしそんな学生はそうそういないのではないだろうか？

翻って、教員としての自分に何ができるのか。大きなことは言えないが、学部時代に何かをつかめなかつた、という人も遅くはない、と背中を押してあげたい。卒業して一度は社会に出た者が、「経験」という探究心と動機のエンジンを得て、また大学に還ってくる。双方にとって有益な流れを大学・社会が応援していく。知識を身につけた次の段階、「知識を利用する」まで学生を育てるプログラムを考えたい。

昨今、大学周辺の地域の人々に大学の講義を開放したりする傾向にあるが、母校を離れて遠方で生活する卒業生のニーズをどう拾っていくか、検討する価値は大いにあるはずである。

(キム インファ／韓国語学)